

いじめ問題に取り組む基本姿勢 10 力条

第 1 条 いじめは被害者の心と身体を深く傷つけ、時には命さえ奪う、重大な人権侵害である

いじめの解決には時間と労力が要ります。しかし、子どもが亡くなってしまったら、生前の比ではありません。どうせなら、生きている子どものためにこそ、全精力を注いでください。

また、死なないまでも、人生を変えるほどの深い心の傷を残すことがあります。大人たちが、真剣に、継続して取り組むべき問題です。

第 2 条 対策はスピードを要する。いじめの芽はできるだけ小さいうちに摘む

よく「こんなのはいじめのうちに入らない」という声を聞きます。もちろん、全ての問題に大人が関与すればよいわけではありませんが、見守りは大切です。いじめになる前にトラブルを解決することができれば、加害者も被害者も生み出さずに済みます。やがて、子どもたち自身が、解決の方法を身につけていくでしょう。

また、小さいいじめは大人のちょっとした関与でなくすことができますが、クラス全体に広がったり、何年も継続するなど、大きくなってしまったいじめを解決するのは大変困難です。

第 3 条 常に最悪の事態に備える。被害者や告発者の安全を第一に考える

子どもにとって最悪の事態とは、「死」です。子ども自身が死んでしまうこと。あるいは、誰かを殺してしまうことです。

大人たちの安易な対応がかえって子どもを追い詰めることがあります。結果を熟慮したうえでの対策をお願いします。

第 4 条 表面に見えているのはごく一部であることが多い

いじめは隠されるものです。ひとつのいじめが発覚した陰には、たいてい、もっと多くのいじめが隠されています。表面だけを見て、大したことはないと判断するのは危険です。

また、クラスや学年、学校全体にいじめ・暴力を容認する雰囲気蔓延していることもあります。加害者を指導して終わりにするのではなく、学校全体で取り組んでください。

第 5 条 いじめは被害者の身になって考える

大人はよく、「公平な立場で」と言います。しかし、いじめに関して公平な立場というのは、傍観者にもなりかねません。みんなが被害者の立場に立てば、いじめはなくせます。

第 6 条 いじめ対策の基本は加害者対策

多くの場合、被害者は少数で、加害者は多数です。また、教師の言葉に素直に従うのも、被害者側です。そのために被害者対策に偏りがちですが、加害者の抱える問題を解決しない限り、いじめは繰り返されます。真の問題解決にはなりません。

第7条 いじめは力では解決しない。子どもとの信頼関係を大切にする

よく、「いじめている子をゴツンとやりさえすれば解決する」という人がいます。しかし、それで子どもは反省するでしょうか。むしろ、自分は大人より力が弱かったからやられたと、ますます力に執着するようになります。チクッたとして、被害者に報復するようになります。

そして、たとえいじめが解決できなかったとしても、先生や親が親身になって支えてくれたという実感は、人を信じる力、生きる力になります。それは、いじめの加害者にも、被害者にも言えることです。

第8条 いじめは大人が知ってからのほうがむしろ危ない

いろいろな事件を調べてみると、思っていた以上に、子どもは切羽詰って大人にいじめを打ちあけていたことがわかりました。しかし、残念ながらその結果、かえって追いつめられたりもしているのです。いじめを知った大人が見て見ぬふりをしたり、いい加減な対応をすれば、いじめの加害者は自分の行為が認められたと勘違いします。あるいは、大人が知っても大したことはない和高をくくって、ますますエスカレートします。一方、被害者は大人に言っても無駄だと絶望してしまいます。

第9条 解決したからといって気をぬかない。いじめは再発しやすい

いじめ事件のあとによく聞くのは、「いじめはありましたが、解決したと思っていました」という言葉です。今のいじめは根深く、1度や2度の指導で簡単に納まるもののほうが少ないと考えてください。報復は必ずあると思って備えてください。繰り返し、根気強く指導していくことが大切です。おざなりな対応では、被害者も打ちあけてくれなくなります。

第10条 いじめは教師、生徒、保護者、地域の複数の目、連携で解決させる

親が、教師が、事前に情報を知っていたら、防げたかもしれない子どもの死がたくさんあります。子どもを守るためには、情報の共有が欠かせません。

また、被害者やその親だけがどんなに頑張ってもいじめは解決しません。どんなに熱心な先生でもいじめにひとりで立ち向かうのは困難です。ひとりで抱え込まずに、できるだけ多くのひとを巻き込んで、協力して問題の解決に当たってください。この問題に真剣に取り組む大人たち、子どもたちを増やしていくことが、いじめを根絶する力になると思います。

そして、子どもたちの身近なところで、いじめ解決の事例を積み上げ、子どもたちに「いじめは解決できる」と信じさせてあげてください。